京都グローバリゼーション研究所通信

第2号　２００７年5月

京都グローバリゼーション研究所
Kyoto Institute on Gkobalization (KIOG)
主宰　佐々木 建
〒 603-8151 京都市北区小山下総町 37
TEL:075-451-8303 FAX:075-451-3682
E-Mail:kitanihito@aol.com
http://www.focusglobal.org/
http://www.focusglobal.org/kitanihito/

目　次

時代の課題
少子化対策を嗤う　*1*
食物を自動車に使ってよいものか　*5*
評論
小国への思いー2006年4月台湾旅日記抄　*7*
書評・紹介
壁は乗り越えられ破砕されるー M・ソーキン編『壁に抗して』　*30*
南北学び合いの枠組を考えるー V・シヴァ『地球民主主義』　*31*
帝国主義論を学び得た幸運ー萬谷迪『世界開発と南北問題』　*34*
短信　*37*

時代の課題

少子化対策を嗤う

今世紀中頃には日本の人口は **9000** 万人台に、場合によってはさらに減少する。つまり、現在の人口から約 **3000** 万人が減少するということだ。この計算は誰にでも簡単にできる。現在 **25** 歳以上の人口が **50** 年先には死亡するものとし、毎年新たに総人口に加わる数を **120** 万人として **50** 年を掛け合わせて算出すると、**9000** 万台の真中あたりになる。その **10** 年後くらいには団塊世代の子どもたちが退場するから、さらに減少して **8000** 万台に突入し、**21** 世紀後半のそれほどおそくない時期に **7000** 万台に突入することは避けられない。人口が集中する大都市圏の社会経済状況と政府の都市政策の現状から見て、出生率が突然上昇してこの傾向に歯止めがかかるとは到底考えられないから、これは確度の高いシナリオである。この人口規模は **1950** 年代初め頃に近い（**1950** 年の人口は **8320** 万人）。つまり半世紀かけて膨張した人口が、再びおよそ半世紀後にほぼ同じ規模に縮小するのである。

私の世代は **1950** 年代の生活を知っている。貧しくても田園的生活に満ちた時代だった。その水準に戻ることは好ましくもある。当時の就業者の約半数は農林水産業に従事

し、人口の都市集中も今日ほどではなかった。自衛隊、警察の数も知れたものだった。ところが、半世紀後に到来するであろう経済社会構造はとてつもなくゆがんだものになり、深刻な構造危機に直面せざるを得ないだろう。簡単な計算で問題点はすぐにも明らかになる。労働力人口が大幅に減少する。この労働力で現在の生産力水準を維持できるのだろうか、官僚機構、警察、軍隊、さらにそれ以外の医療制度、介護制度等を維持できるのだろうか。都市への人口集中が現状のまま維持されるとすれば、地方の過疎化は絶望的な水準にまで進むのではないか。農林水産業は維持できるのだろうか。

50 年先はさほど遠い時代ではない。いまの **10** 代の若者は確実に体験する時代である。というよりも、いますでに体験されはじめ、人口減少社会がもたらす構造的歪みはすでに方々で観察される。人口減少に目をつぶり、人口減少社会を人口の年齢構成の変動の問題に矮小化し、年金制度や医療保険制度の危機としか関連させない態度は無責任というものだ。出生率が少しばかり上昇したとか、出生数が死亡数を若干上回ったとか、さほど大きな変化ではないことを言いふらしているが、これは嗤うべきことではないか。

人口が激減しても、労働生産性をそれに対応して上昇させるなら、いまの経済的豊かさを維持できるという主張も方々で聞かれる。この主張が政府の基本路線となり始めている。この議論のいい加減さは誰にでも分かることだ。製造業の基幹部門はいざ知らず、サービス業や公共サービスがこの減少を補うほどまでに労働生産性を高めることは至難の業であろう。運輸労働者の生産性は、一人時間あたり

走行キロ数、運搬した物量トン数で示される。現状が示すように、運輸産業における生産性向上は事故の多発という凄惨な状況をもたらしかねない。画期的な都市物流システムが開発されない限り運輸部門での生産性向上は不可能であろう。医療労働者の生産性とは何か。医療従事者一人時間あたりの患者数で示される。ロボットの導入によって医療の生産性を高められると主張された時期もあったが、医療労働での生産性向上は患者に対するサービスを低下させる。介護労働も同様である。

軍隊の生産性とは何か。兵士一人時間あたり殺戮数である。アメリカがイラク戦争で試みた高度生産性戦略はものの見事に失敗し、追加派兵を余儀なくされ、兵力不足を露呈している。結局のところ、戦争とは兵器ではなく人間がするものであることをあらためて世に知らしめた。

要するに、社会的に必要な就業を維持するための労働力、国家権力を維持するための軍隊や警察等に必要な人員は、製造業の生産性向上と関わりなく維持されなければならないと言うことだ。製造業はそれを維持するためにさらなる余剰を生み出すことが求められる。しかし、現実に進んでいる事態はこれとはまったく正反対である。長時間労働と低賃金労働力によって競争力を維持している惨憺たる状況を見てみたらよい。

しかしよく考えてみると、今進められている格差是認の成長戦略はどれほど美しい表現で飾られていても、限られた労働可能人口を国家と巨大企業が優先的に確保し、社会的インフラも富裕階層が優先的に利用できる施設に集約することを目的にしているのかもしれない。このように考え

るとよく理解できる。ワーキングプアどころか中産層そのものが限界に追いやられるのだ。

もはや待ったなし、新成長戦略につきあっている余裕はない。年金制度の維持の手段として少子化対策を論じるなど嗤うべきことであろう。求められているのは、いま進められている政府と大企業の戦略に対抗する、新しい均衡の取れた労働力政策と産業政策、国土利用計画の議論ではないのか。国際関係で言えば、「小国」として世界とアジアの安定と平和にどのように貢献しながら安定して生きるか、その戦略を議論することではないか。

私が決して生きることのない時代について夢想するのは、憲法前文の精神に沿った国づくりであり、地球環境保全の理論と技術を集積して尊敬される国にになることだ。アジアのみならず全世界から優れた人材が集える国になることだ。大都市圏と農漁村との均衡の取れた関係が回復され、都市の田園化が進む時代の到来である。瓦解しつつある「経済大国」の現実を顧みることもなく論じられる少子化対策を嗤う。

食物を自動車に使ってよいものか

２００６年１月、アメリカ合衆国大統領ジョージ・ブッシュは年頭教書演説において、石油に変わるエネルギーとして注目されるエタノールの生産技術においてアメリカが独占的地位を確立したいとする願望を表明した。このアメリカのエネルギー政策は地球温暖化対策であるとするむきもあるが、とんでもない。教書を読んでみたらすぐに分かることだ。ブッシュの狙いはアメリカが不安定な中東産出の石油への依存から脱却し、エネルギー市場でのアメリカの覇権を強化することだ。

ところがこの頃から、エタノール使用を温暖化対策の切り札とする議論が盛んになり始めた。エタノールに代表されるバイオマスは二酸化炭素排出削減に貢献する可能性は確かにある。原料が伐採され、刈り取られる前段階で光合成によって二酸化炭素を酸素に変える役目を果たしているし、消費する分だけ植生を再生、維持すれば、理論的には排出ガスはゼロとなる。しかし地球規模で考えなければ、均衡の取れた消費は不可能であろう。森林資源の潤沢な国が補完的に利用することに限定されるのではないか。しかも、採取、収穫と運搬、生産設備の建設と稼働のために追加されるエネルギー消費を考慮に入れると、果たして二酸化炭素削減に有効な施策といえるかどうか危うくなる。

最大の問題はエタノール生産のために最も注目を浴びている原料がトウモロコシとサトウキビであることだ。どち

らも人間にとって欠かすことの出来ない基本的生活資料である。トウモロコシは、最も重要な家畜飼料であるだけではない。アフリカや南米諸国では基本食材である。日本製のビールにもコーンスターチが使用されている。このような食物をガソリンに転用してよい筈がない。

その理由は明白だ。

第 1 に、地球規模の絶対的食糧不足を加速する。あるいは特定の国、地域の飢餓を促進しかねない。

第 2 に、これらの食物の世界市場価格を騰貴させ、第三世界の窮乏を促進する。しかもその極限にまで。すでにこれらの食物の市場価格は急騰しはじめている。先進国の市民であれば、食肉や砂糖等の価格上昇をある程度までは負担できるかもしれないが、第三世界諸国ではそうはいかないだろう。

第 3 に、生態系に深刻な悪影響を及ぼす。遺伝子組み換え作物の作付面積を拡大するだけでなく、肥沃土の収奪を促進し、バランスの取れた農業の発展を阻害する。

考えて見たらよい。自分の家庭で食物が底をつき自動車用ガソリンも底をついたとき、私たちはどちらの補充を優先するだろうか。食物に決まっている。ところが、いま進んでいるのは何が何でもガソリン優先ということではないのか。しかも貧しい隣家の食べ物まで掠め取るというのだから、人倫にもとる行為といわざるを得ない。

クルマ社会を抜本的に見直し、エネルギー消費を大幅に削減する省資源的生産・生活制度を作らない限り、問題の解決はない。いまその方向に舵を切る絶好の機会が到来しているのだ。

評 論

小国への思い

２００６年４月台湾旅日記抄

はじめに

【批判の自由を求めて】

2006 年 **3** 月末で私は大学教師の仕事から最終的に解放された。台湾への旅を思い立った最大の理由は、大学教師から市井のフリーランスの書き手に変わるためのある種の「儀式」が必要と考えたからだ。長い教師生活で染みついたスタイルはけっして心地よいものとは言えない。教師を辞めても大学と大学的学問にこだわって生き続けるのも確かに一つの生き方ではある。しかし、大学教員は通常の会社勤めと変わるところのない職業と考えていた私にとっては、大学流学問とこれまでに自分の身体に染みついたさまざまな自己規制を振り切り、これまでとは違った研究・執筆世界の探求なしには生きる術がない。それは必ず見つかる筈だし、見つけなければならない。大学では十分に展開し得なかった「批判の自由」と独立性をどのような経験をふまえて獲得していくのか、旅をして考え、一呼吸おいて再出発してみようと考えたのだった。

フリーランスとして研究を続けるのに重要なことは、直

面する現実に可能な限り近づいて、そこに吹く風を肌で感じ取ることだ。旅は心地よく感性を磨ける機会である。さらにもう一つ、批判の自由を多様な形態で表現することだ。どちらも現在の大学的学問には欠けており、そのことが研究成果をつまらないものにしているように思えててならないのだ。

先日惜しまれて逝った E・サイードは、分化された専門主義とは区別された普遍性を語るマチュアリズムを知識人のあるべき姿としている。ここでサイードの知識人論を詳しく紹介することはできないのだが、すこしだけ引用しておく。

「・・・まもりを固めて防御すべき縄張りもない知識人には、つねに、不安定で遊牧民的なところがある。それゆえ知識人には、虚飾と尊大な身振りよりも、自己に対する冷笑こそ似つかわしく、言葉を濁すことよりも、ずけずけものをいうことのほうが似つかわしい。しかし、そうなると、このような表象行為をつづける知識人には、やむをえないことながら、政府高官とは、お近づきになれないし、彼らから国家的な名誉を授かることもなくなる。これは孤独な、むくわれない生きざまといえば、まさにそのとおりである。けれどもこれは、長いものには巻かれろ式に現状の悲惨を黙認することにくらべたら、いつも、はるかにまともな生き方なのである。」（エドワード・W・サイード、大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社ライブラリー 236、平凡社、1998 年 3 月、23-24 ページ）

「・・・アマチュアリズムとは、文字通りの意味をいえば、利益とか利害に、もしくは狭量な専門的観点に縛られることなく、憂慮とか愛着によって動機づけられる活動である

現代の知識人は、アマチュアたるべきである。アマチュアというのは、社会のなかで思考し憂慮する人間のことである。そして、そうであるがゆえに、知識人はこう考える。もっとも専門的かつ専門家むけの活動のただなかにおいても、その活動

が国家や権力に抵触したり、自国の市民のみならず他国のしみんとの相互関係のありmかたにも抵触したりするとき、知識人はモラルの問題を提起する資格をもつのだ、と。・・」（同上、136-7 ページ）

専門性を売り物に権力に取り入るえせ知識人が力を得ている中で、権力者との交際とは無縁な「批判の自由」を謳歌することには得も言われぬ爽快感がある筈だ。それと同時に、そのように生きる条件は現代日本ではますます狭められているのだから、苦労は尽きない筈だ。しかし、そのように生きることは面白いことではないか。

【アジアについての無知を恥じる】

台湾で考えてみたいことも沢山あった。台湾については、日本の帝国主義支配の構造について多くの研究成果がある。ところが現代台湾については日本人の研究者には見るべき仕事がない。あるのかもしれないが、私の能力では発見できないのかもしれない。発見できなかった理由は簡単だ。「一つの中国」論に批判抜きで傾倒していたからだ。左翼学生の片割れであったから、なんのこだわりもなく中国共産党贔屓になった。毛沢東はつねに善玉であり、蒋介石は悪玉であった。中国共産党の主張に疑いを差し挟むことなどありえなかった。しかも大陸側だけでなく台湾の国民党も大陸反攻を主張していたのだから、「一つの中国」は自明のことに思われた。

この國の人種構成や先住民についても、いくらか知識があっても（あるといっても「高砂族」というかっての植民地統治時代の表現が記憶の片隅に残っている程度なのだが）、本省人と外省人の対立のことなどまったく知らなか

った。ぼくが田舎の高校で受けた歴史教育では、現代アジアはその対象から完全に抜け落ちていた。まともな知識は持ち合わせていなかったことは、当然といえよう。

台湾現代史をめぐる複雑な関係に目を開かせてくれたのは、侯孝賢（ホウシャオエン）が監督した名作「悲情城市」である。国民党による大虐殺、いわゆる2・28事件を、私はこの作品によってはじめて知った。タブーとして封印されていたこの事件が公然と議論されるようになったのには、この映画が重要な役割を果たしたという。

この映画で強く印象づけられたのは、刑場にむかう友を送るシーンで歌われたのが日本の歌だったことだ。死んでいく彼らを結びつけていたのは北京語あるいは台湾で使われている彼らの方言ではなく日本語だったということに驚かされた。大きな問題を突きつけられた思いであった。この国の人びとには、日本の統治以前には民族意識やその種の結集はなかったのだろうか。

台湾独立運動のことを知ったのも、この頃だったろうか。京都のある大学に客員として滞在していた C さんからであった。C さんは逃れて海外の大学の教職に就き、李登輝政権登場後に台湾に帰国した。台湾を訪れた際に独立問題につて彼の考えを拝聴し、じっくりと議論してみたいという願いは、彼の急死によって実現叶わぬものになってしまった。

【「小国」へのまなざし】

私の国際法の知識は貧弱なものだ。新たに国家をつくる条件がどのようなものかについて、ほとんど何も知らない。独自の統治形態を作ろうという意志は、さざまな大国の軋

轢の狭間でさまざまな形態で実現し、またそれを実現しようとする動きが世界中で数え切れないほど展開されている。古くはシンガポールの独立、最近では東チモールの独立、ソ連・東欧社会主義解体後の無数の「小国」国家の誕生の流れをみると、国家の形成についての私の知識は現実によってすでに乗りこえられている。アフリカや中東の政治状況を見ていると、この新しい流れはとぎれることなく続き、これからも多数の「小国」が誕生するであろう。民族や人種、宗教の違いを自覚して独自の国家の形成に突き動かされかねない地域は多数存在するからだ。

その一方で、グローバル資本主義の支配はますます強固になっている。膨大な資金を運用し、投機によって利得を得る資本主義のもとでこれらの小国は収奪され、経済的、政治的従属は深まるばかりだ。利得を生まない小国は見捨てられ、荒廃の中に放置される。国民意識の高揚という熱狂に突き動かされて独立しても、小国の経済的存立条件は狭まるばかりである。大国の浪費によって引き起こされた地球環境危機によって一番の被害を被るのも小国である。文化も同様だ。小国の言語や伝統文化は大国文化の隆盛によって片隅に押しやられ、破壊や略奪さえ進んでいる。小国の権利の尊重し、小国の視点からグローバル資本主義を批判する視点が求められているのではないか。それなしには、過去の多くの戦争や紛争の過ちを繰り返すことになりかねない。残念なことに、その兆しはすでに方々で観察される。

台湾の人びとにも統治形態を自らで選ぶ権利が与えられている。現代世界では小国として生きる強固な意思があるならば、それを求めることが出来る。**100** 年を超える大陸

からの切断の歴史によってそれぞれの側にまったく異質の政治形態と文化が定着しているのではないか。そうであるとすれば、台湾の人びとが望めば独立もできる筈だ。ところがこの国の不幸は、国際政治の風向きによって国のあり方が揺らがざるを得ないことだ。統治にかかわる国民党と外省人の大陸への根強い郷愁がある。このことがこの國の将来に大きな影を落としている。

【東アジア共同体と小国の論理】

いつの頃からか東アジア共同体をめぐる議論が盛んになった。この議論の意味を私はいまだに理解できないでいる。私は 20 代の学者修業時代からヨーロッパ経済統合を研究テーマの一つにしてきた。ヨーロッパ「共同体」の結成は大国、どの時点で観察しても超大国に対抗する小国の合衆国結成への強固な意思を基礎にしていたと思う。対抗すべき大国はある時はソ連であり、ある時はアメリカであった。その点から言えば、いま東アジアで語られている試みはまったく異質のものだ。そもそも中国や日本のような大国あるいは超大国を中心にした結集など言葉の真の意味での共同体ではないことは誰が考えても明らかであろう。

ヨーロッパ共同体は、かって大国としての復活を賭けて軍事的冒険を試み惨禍をもたらしたドイツが今日に至るまでその贖罪をねがっているその態度によって実現したといってよい。W・ブラントがワルシャワのユダヤ人ゲットー記念碑の前にひざまずいた贖罪の態度表明はその象徴であったし、１９８５年に当時の大統領リヒアルト・フォン・ワイツゼッカーが第二次大戦終結４０周年にあったて行った演説も贖罪を語り継ぐことの意義をドイツ国民に訴えた

記念碑的文書である。指導者たちも含めた贖罪の態度があるからこそヨーロッパの人びとはドイツのこの歴史的決意を疑うことはない。

東アジア共同体設立をめぐる状況はというと、ヨーロッパの状況とはまったく違う。およそ政治状況については議論を意識的に避けているとしか言いようがない。これではたして共同体（コミュニティ）という名にふさわしい信頼関係を築けるのだろうか。

東アジアの超大国が共同体に賭ける野望は明白だ。地球規模での覇権を望む中国、日米同盟を維持してアジアにおける影響力を拡大したい日本を中核に企図される構想は、むしろ両大戦下のヨーロッパで展開された覇権を競って展開されたヨーロッパ統合構想を思わせる。あるいは「大東亜共栄圏」こそその名にふさわしい。

現代の統合は「小国」の利益を尊重するものでなければならない。大国は覇権を求めすものではないことを繰り返し表明すべきであろう。そのためには過去の歴史の負の遺産について和解も必要であるし、自らが犯した過ちに対する絶えざる謝罪によって「小国」であることを表明することが共同体の中核たり得る必須の条件ではないか。「小国」の利益を侵害せず、それらの国々の政治的、経済的安定を維持していく条件を作り出すこと、これが安定的な地域的連帯を維持し、恒久平和につながる。

東アジアのいくつかの国ぐにが将来にわたって政治的に安定するとは言い難い状況にあることにも注目しなければならない。超大国中国が今後も共産党の支配のもとで政治的安定を維持できる保証はない。経済的破綻、環境の悪化はこの國の政治状況を一挙に深刻なものになるかもしれな

い。五族共和の体制も揺らぐことがあるかもしれない。北朝鮮の政治体制がどのように維持されるのかも不透明である。拉致問題解決のために経済制裁の強化を主張する日本政府も、この国が崩壊したときに負わなければならない経済的、社会的責任をつねに自覚していなければならないのではないか。

東アジア経済統合を推進するには、あらゆる政治的条件を精査する必要がある。この点が多くの論者に欠けている。そのことが乱暴な議論を生み出すことにもなっているのではないか。特に「小国」台湾の観察は重要だ。この國は、中国の覇権を実現するかなめであることはいうまでもない。その帰趨が東アジアの力関係を大きく変化させる。台湾は東アジア地域の経済活動の最も重要な担い手の一つであり、その意味であり得べき共同体のかなめである。この国を視野に入れずに東アジア統合を論じることは意味がない。

２００６年４月台湾旅日記抄

◆４月 1 日（土）◆

【豊かさとは何かー深抗から士林夜市へー】

深坑の商店街の賑わい

台北到着早々、L 夫妻の案内で郊外にある深抗の市を散策する。高級レストランで食事するのが大学教授の習わしと誤解されることが多い。それに加えて食欲旺盛でまるまると肥え太った私はいつもそのように誤解され、レストランに案内される。長い教師生活や外国暮らしで身に染みついた教授的生活態度がこの誤解をさらに増幅させる。しかし、私の本質は別のところにある。屋台でも路地裏でも食してみたい、現実の観察と体験を重視すべき経済学者なら当然のことだろう。

週末で賑わうこの市の入口に立ってぼくは気持ちが昂ぶるのを抑えきれず、思わず歓声をあげた。店頭に並べられた旺盛な食欲を迎え撃つ食材の集積、粽（ちまき）、豆腐料理、菓子等、その種類の多様さはどうだ。日本の食文化の影響も見られる。植民地統治時代からのものもあるし、最近の日本文化の影響もみられる。粽にもこれだけ多くの種類があることをはじめて知った。

夕食を摂るべく、士林夜市を訪れた。雑踏する細道、その真ん中にさらに屋台でている。警察の手入れがあるとの情報が入ると、屋台は雑踏をかき分けて大移動を始める。雑踏はさらに増幅される。この人混みをかき分けて食を手に入れるのは苦労なことであった。その夜市の中心には媽

祖を祀る見事なつくりの寺がある。深抗の市にも中心に大きな寺があった。道路を挟んで奉納舞台が向き合っている。祭りの時の賑わいを想像した。侯孝賢が監督した「戯夢人生」の主人公の老芸人が遣う人形劇もこのような舞台で演じられただろうか。

この屋台で埋め尽くされた通りに満ちる香りは、子ども時代の祭りの宵宮の状景を思い起こさせる。父と一緒に出かけた夜店通りは、アセチレンガスの明かりで漆黒の闇に浮かび上がる。どのような店があるのか、胸が躍る。アセチレンガスの燃焼の強烈な香りや夜店のおでんのにおい、綿菓子の甘い香りが混ざり合っている。その香は独特だった。残念ながらあの時の匂いとは違う。あの頃の闇に浮かび上がる状景を思い起こすことができる。ここも暗い。ただあの頃の漆黒の闇ではない。

都市の巨大化は本来人間に備わっていた連帯感情を破壊している。祭りやさまざまな宗教的、そして場合によってはシャーマニズム的な習俗は、その連帯性の重要な部分であったと思う。この夜市の状景の中に自分を置くと、失われた連帯性と豊かさを惜しむ感情がこみ上げてくる。私がこのように言うと、合理主義者で唯物論者が祭りや宗教的感情の再生を願うのかと嘲笑の対象になるかもしれない。しかし、これは信仰ではない。人間生活の備わった習俗なのだ。

深坑で見つけた粽専門店。
その多様さには驚かされる

この雑踏に身をゆだねながら、一昨年に訪ねた北京での体験と思索を思い出していた。社会主義的改造と資本主義

的近代化には明らかに共通項がある。人間的連帯の場を徹底的に攻撃破壊し、それから分断されてばらばらにされた個人を作り出し、市場や社会主義的計画の権威に忠誠を誓わせる。その点では北京も東京も同じ雰囲気を持っている。無機質な都市に改造することに何の抵抗もない東京と、文化大革命によって既存の社会的関係を破壊し、ここでも今何の抵抗にも遭わずに都市改造が進められる北京、この両都市の根っこは同じではないのか。。

人間は地域的な連帯なしには生きてゆけない。生から死までを一貫する地域の習俗は、人間社会に本来備わった関係であると思う。それを否定して、それを破壊してまで経済的、政治的合理性だけを優先させると、人間の個としての漂流が始まる。現代都市の荒廃の原因のひとつを、私はこの点に見出したい。

◆４月２日（日）◆

【園山大飯店】

長年の念願かなって昨夜は園山大飯店に泊まることができた。台北市内を一望できる丘の上に立つこのホテルはその華麗さに惹かれただけでなく、その歴史にも魅せられたからだ。このホテルは蒋介石夫人、宋美麗が **1950** 年代中頃に建てたもので、大陸反攻も叶わず、国際的孤立を深める中で、迎賓館として利用できるように華麗に建設したのであろう。失った本土の王城への郷愁を感じさせられる。日本統治時代には台湾神社があったところで、そのあとも

まだ残っているという。日本の支配者たちはその支配の象徴として最も重要な立地に神社を建立する。この場所は風水で占っても、台北で最も重要な場所だったのだろう。

園山大飯店

国民党は日本の企業や個人の資産を党の財産として接収し、世界で最も富裕な政党となった。このホテルもその資産によって建設されたのかもしれない。**11** 階には宋美麗のための居室があるはずで、見学したいと申し入れたが、非公開ということで断られた。泊まり心地はというと、ビジネスマン向けのホテルにばかり宿泊している私には、正直言って贅沢すぎる。天井は高く、部屋も広く、華美をもてあます一夜であった。インターネットの利用も使い勝手がよくないのも、ビジネスマンが宿泊することがないからだろうと思う。

【陽明山・草山行館・蒋介石】

L 君夫妻に台北郊外の陽明山を案内してもらう。台北市民の散策路とでもいうべきか、週末ということもあって人出で賑わい、道路も渋滞が続く。蒋介石の別荘が残っているというので、立ち寄ることにした。

かっては衛兵の詰所として使用したと思われる建物の前のみちを下っていくと、その建物にたどり着く。彼らが簒奪した巨額の資産、それによって建設した建造物の壮大さに比べるとなんと質素なことか。昨夜泊まった園山大飯店とは比較することすらはばかられる平屋建ての極小の建物

である。正面に蒋介石の立像がなければこれが官邸として使用されたとは到底想像できない。パンフレットによると、かっての台湾精糖の保養所だったものを蒋介石が暫定的に官邸として使用したようで、おそらく山中で守りやすかったのだろう。台北市内に本格的な官邸が出来てからは別荘として使っていたという。

純日本風とはいいがたい風情が面白い。内部の主な部分は芸術センターとして利用されているが、部屋がいくつか当時のものが残され、蒋介石、宋美麗夫妻の結婚衣装、蔵書、写真等が展示されている。喫茶店もある。パンフレットによると、**2002** 年に文化省と台北市が発案してこのような形になったのだという。陳水偏政権の国民党に対する態度も読み取れて興味をひいた。

蒋介石の政治的功罪、台湾で行った弾圧の評価は置くとして、このような質素な日本風建物に憩う蒋介石の感性の柔軟さを思った。展示の中に彼の書き込みを発見した。キリスト教関連の書物の写しのようだが、その書き込みの筆致は端正で見事なものだった。これを観察しながら、彼の政敵であった毛沢東の右肩上がりの癖のある筆致を思い出していた。学生時代毛沢東に現代の英雄像を見ていた私には、あの筆致は文字通り英雄的に見えた。いま蒋介石の筆致と比較してみると、毛のそれはあざといまでに作為的に思われる。毛は彼の固有の癖を意図的に「英雄的」筆致に作りかえたようにも思えてならないのだ。

深い谷を見下ろす喫茶店のベランダに腰を下ろして、蒋

介石、毛沢東、そして孫文、袁世凱、張作霖、張学良等、東アジア近現代史の主役たちの思いの交錯する場所にすわって、あらためて彼らの位置を勉強してみたいと思った。

◆４月３日（月）◆

昨夜は台北郊外の北投温泉春天酒店に投宿。L 君の車で台中に向かう。高速道路に沿って工業地帯が展開する。L 君の説明によると、台北ー台中間の地域には客家人の多く住む地域で、彼らの勤勉性は工場進出に有利な立地条件なのだそうだ。中国大陸から流出した中国系住民が本省人、外省人の区別だけでなく、ホーロー人、客家人の系統があるのだという。この二つの系統は言語、文化の独自性を今日に至るまで維持しているという。

【カラオケ】

台中着。新市街で昼食後、旧市街にある T 君の友人宅に上がり込みカラオケ。大好きな歌を多数気持ちよく唄って疲れをいやす。台湾ではカラオケは大流行という。面白いのは台湾の二つの方言、北京語、それに日本語ヴァージョンが加わって４種のプログラムがある。ナツメロ、軍歌が多いのにも驚かされる。友人たちのいうには、台湾のうたと日本の演歌の節回しが似ている上、漢字表現で共通点が多いので好まれるという。戦争を体験した人たちが軍歌を含めて戦前の日本のうたを好んで歌うのだという。「非情城市」で獄中で捕らえられた若者たちが処刑される友を

日本のうたで送るシーンを思い浮かべたが、それでもこの説明には納得できなかった。日本人である私に用意された答えのようにも思われた。

【台中市内に残る統治時代の跡】

日本で買ったガイドブックを覗いてみると、台中の旧市街は雑然としていて見るべきものがないとある。台北が首都や官庁街として整備されていてあまり人間が住む町の感じがしないにに比べて、このまちはその規模も生活ぶりも人間的だ。よく観察すると、日本統治時代の家屋がまだ多数残されている。

昨日草山行館で買い求めた竹の印材に印鑑を彫ってもらおうと旧市街の印舗を訪れた。８０歳前後の女主人が流ちょうな日本語で応対してくれたのには驚かされた。台北師範附属中学で学んだという。台湾が解放されてすでに６０年に近いのに母国語同然に話せる秘密を尋ねてみた。いまでも同窓会を開き日本語を話しているという。師範附属での日々が彼女にとってどれほどすばらしく有意義なものだったかを語り、統治下の皇民化教育を無条件で賞賛した。私にはそのように聞こえた。その雰囲気の中では日本の支配がつらいものであったかどうかを聞くことすらはばかられた。皇民化政策に対する人種や階層によって態度はさまざまだろう。しかし、この同化政策によって一体感をはじめて獲得した人々もいたことは確かなことだと思われる。「悲情城市」のあのシーンの意味の一部をなんとなく理解できたような気もした。

L 君、**T** 君と車で東に向かい、谷関温泉龍谷大飯店に投

宿。数年前の大地震による山崩れ、土石流の爪痕がまだ多く残されていた。

◆４月５日（水）◆

　早朝、露天風呂を楽しむ。朝食も美味。しかしさびれようが気になる。地震災害からまだ完全に復興していないのだろう。台中に帰り、T 君の車で日月潭に向かう。この湖の周辺は台湾有数の観光地で、T 君が是非とも案内したいということで実現した。

【霧社】
　台中から東に山中に入り、九族文化村に案内してもらう。台湾先住民について知識を得たいと思って立ち寄ったのだが、先住民文化を利用した遊園地だった。近年先住民は雇用機会を求めて都市に流出しているという。
　車中から道路標識に目をやると、霧社という地名が飛び込んできた。驚愕し、無知を恥じた。霧社事件というのは日本の統治下におきた最大の先住民反乱である。この事件は授業や講義で教えられた記憶がない。知ったのは、五味川純平の大作『戦争と人間』によってであったと思う。私は「霧社」は反乱を指導した政治結社の名前と勘違いをしていたことに気づかされた。地名であったとは。この蜂起の指導者と犠牲者を祀る社があるという。次回の旅ではぜひそこを訪れたいものだ。
　当時の日本軍はおそらく台北、台中等の都市周辺に展開

していた筈である。これほどまで深い山中にまで出兵していたことに驚かされる。その鎮圧が困難を極めたことは容易に想像される。幕末蝦夷地のアイヌの蜂起、１９６８年の南ア・アパルトヘイトに抵抗したソェト蜂起、さまざまな闘いを思った。霧社事件は皇民化政策がいかに固有の文化を蹂躙し、差別的で欺瞞に満ちたものであったかを示す歴史的事件であった。

◆４月６日（木）◆

　昨夜は日月潭湖畔の哲園に宿泊。猛暑の中をあまり水を摂らずに移動したので、軽い脱水症状になる。着くなりベットに倒れ込み、楽しみにしていた夕食も摂らず朝まで眠り込む。
　この湖畔の宿は気に入った。外観はログハウス風で、台湾檜で内装され、その芳香がリラックスさせてくれる。昨夜の深い眠りもそのせいだろうか。日本の檜も心地よくさせてくれるが、台湾檜の芳香はそれに優る。テラスに出ると湖が足下まで迫っている。静寂そのもの。

【日月潭での思い】
　宿泊客は数組で、手持ちぶさたの様子の支配人が流ちょうな日本語で話しかけてきた。外省人という。いつもの問をぶつけてみた。答えはいつも返ってくるもので、日本の植民地支配は国民党の過酷な支配に比べれば、台湾によい結果を沢山残してくれたという。昨日の印舗の女主人とい

い、日本に対する彼らの穏和な態度をこの答えですべて説明し尽くすことはできるのだろうか。

この一帯は先住民の居住地であったという。水力発電のためにダムに変え、湖岸に住む先住民は移住を余儀なくされた。祭祀を行う島も小さくなってしまった。この地域の先住民人口は数百人に減少しているという。移住者と先住民の間のかろうじて維持されてきた住み分けも、「近代化」の下ではいとも簡単に破壊される。日本の統治が作り出した緊張関係の証しの一つ、しかも重要な側面を見ることが出来た。北海道サル川流域のアイヌの祭祀地域をダム建設で破壊しようとした事件を思い起こしていた。かって植民地支配の下で強行されたマイノリティの生活と文化の侵害は決して他人事ではないのだ。ぼく自身の無知を悟らされた日であった。

午前１１時、L 君の迎えの車で台南に向かう。高雄まで足を延ばすつもりだったが、猛暑で体力に不安があり断念。車窓から見る風景はすでに熱帯の雰囲気である。考えてみれば、この國はフィリッピンにも近い。東アジアと東南アジアの二つの側面を持ち合わせているのだ。

午後１時すぎ、台南着。郊外には農漁業地帯に IT 関連企業を誘致するサイエンスパークが開発され、すでに多くの企業が進出している。

【鄭成功の時代】

このまちを今度の旅の訪問先にれたのは、オランダ東インド会社進出の時代、鄭成功の時代の遺構を見たかったからだ。17 世紀前半にオランダは台湾に進出し砦を築いて通商の拠点にしたが、1661 年に明の将軍、鄭成功の奇襲の前に敗北し、オランダの支配は数十年で終わった。清に抗して明の再興を目指した鄭成功の試みも彼の死後に潰え、台湾は清の支配下に入っていく。鄭成功は日本でも有名である。彼は平戸で日本人を母として生まれた。近松門左衛門の浄瑠璃「国姓爺合戦」は彼を題材にしたものだ。

砦跡が赤崁樓として今日まで伝わっている。建物は清朝時代に改造されたが、砦の 1 階部分はオランダ統治時代の遺構をよく残している。鄭成功時代の展示を中心にした博物館となっている。

安平古堡はもともとは海岸にあって、オランダ人の住居と商館が立ち並んでいたようだが、海岸線は完全に変わっている。遺構も日本が転用する際に破壊したのであまり原形をとどめてはいないが、函館の五稜郭のようなオランダ式の要塞があったことを伺わせる。ここに立つ鄭成功の銅像は台湾海峡の彼方、中国本土を凝視している。明朝の再興を願った彼の遺志は国民党の大陸反攻の願いに継承されているようにも見えた。

赤崁樓前の鄭成功記念碑

おわりにー旅を終えてー

台南から台中を経由して台北に戻り、短い旅は終わった。沢山の学びの課題を背負い込まされた。帰国後仕事場の書棚は並べ替えられ、現代東アジアに関する書物が中心に置かれた。読みこなせるかどうかは別にして、東アジアの国ぐにではどの國でも人種的多様性に対応して多様な歴史的的体験が集積されていることを学ばなければならないと思う。この程度の水準の見聞記をを公表することは気恥ずかしいことだが、昨今の軽薄で乱暴な共同体論議にいくらかでも抗することができるのではないか。

台湾についていえば、経済的、文化的に無視できない関わりがあるのに、この国の将来について議論することはあまりない。かって統治時代に暮らした人々はその体験に郷愁を覚え、日本で学んだ李登輝氏の登場と彼の日本贔屓に感動する。若者たちは俄にグルメに変身して台湾旅行に出かけるのに、この国の歴史的体験についてはまったくといってよいほど関心がない。というよりも教えられていないのだ。台湾の歴史的意味をいま論じることは重要ではないか。すくなくともこの私は今、この国についての無知を恥じている。

赤崁樓の前で

この旅行記のタイトルを「小国への思い」としたのには、二重の意味がある。一つは、最近の国内の偏狭なナショナリズムの動向を前にして、日本が「小国」であることの自

覚を内外に示すことは意義のあることだと考えはじめたからである。経済大国という自ら命名した地位に酔いしれ、それに軍事大国を塗り重ねようとするのは虚妄という他はない。

もう一つは、グローバル資本主義の下での「小国」の意義を再吟味しようというねらいである。社会主義解体を契機に始まった「小国」独立の波は、地球の地図をますます細かなモザイクで染め上げている。それら小国の生存条件は厳しいものだ。内在する民族的、人種的対立、宗教的対立を激しくしている。熱狂的な民族主義はその國の内部に潜在しているかっての歴史的事件を思い起こさせ、そのことがこの熱狂にさらに拍車をかける。小国での熱狂が大国の介入によってさらに過熱されるとき、世界にいったいどのような結末がもたらされるのであろうか。その結末はいま世界の至る所で展開されている。悲惨な殺戮と難民、窮乏の日々である。

小国の経済的生存条件はかってと比べて大きく変わっている。グローバル資本主義の下では、これらの国々の経済的自立の可能性はますます低くなる。つねに巨大金融資本の投機の対象として翻弄される。資源の発見はいまでは、鉱物資源に止まらず、それが魚であれトウモロコシであれ、あるいは人間の技能さえも列強の独占的支配の対象になっている。大国は地球上のあらゆる資源を独占する野心を隠そうとはしない。ヒルファーディングもレーニンも、帝国主義の時代の小国の位置とその命運に注目していたことも思い起こされる。グローバル資本主義批判の重要な視点でなければならず、小国の平和で安定的な発展の道を模索することは、恒久平和と地球の安定にとって重要な意義を持

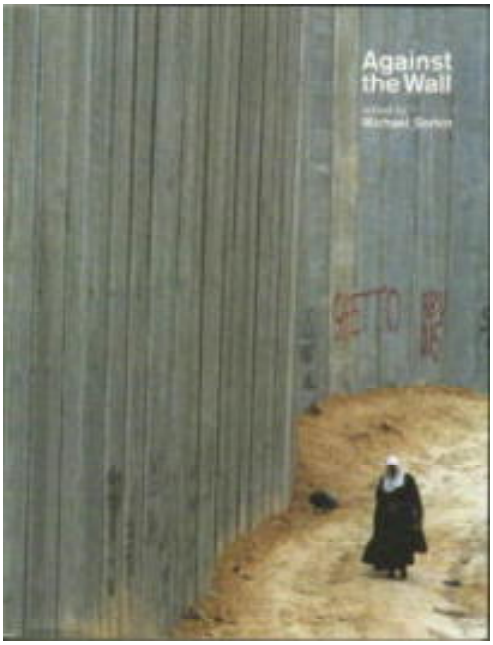
っているといえるだろう。

【付記】

　最近刊行された次の書物は、現代台湾を理解するために必要なこの國の歴史的体験を知るのに有益である。周婉窈著、濱島敦俊監訳、石川豪・中西美貴訳『図説・台湾の歴史』平凡社、**2007** 年 **2** 月。『朝日新聞』は「写真が語る戦争」というシリーズを連載しているが、**2007** 年 **4** 月 **15** 日付の紙面で貴重な写真とともに「霧社事件」を紹介している。

書評・紹介

壁は乗り越えられ破砕される
ーM・ソーキン編『壁に抗して』ー



「壁」という表現の流行に、私は抵抗を感じる。著者や編集者がどのような意味をこめて使っているのかは知らない。「壁」は、それが物理的なものであれ心的なものであれ、他者を排除し特権や優越を守るために築かれる。「壁」は本来共存できるはずの人びとを分離し、それによって憎悪をかき立てる。幽閉し、抑圧するための「壁」もある。「壁」はそれを乗りこえ、破砕しようとする試みる人の前に立ちはだかり、時には絶望させる。

現代の物理的な「壁」の典型は、他者の入国を防ぐために国境に築かれる壁である。最近建設されたもので最も醜悪なもののひとつは、イスラエルがテロリストの侵入を防ぐという「安全保障」を口実に建設した壁である。かって南アの特権白人層がアパルトヘイト体制を維持するために黒人をかいらい国家に閉じこめた時でさえも、これほどまでのコンクリート壁で隔離することはなかった。旧約聖書「ヨシュア記」が伝えるように、予言者ヨシュアはイスラ

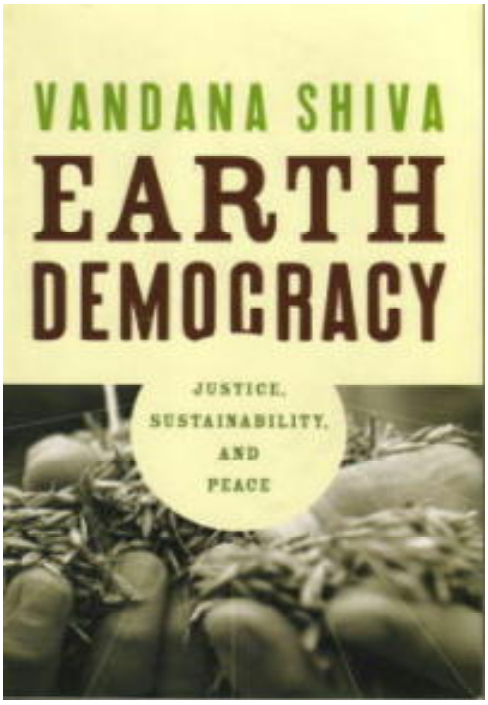
エルの民を率いてヨルダン川を渡って約束の地に入り、エリコ（ジェリコ）を侵略した時、城壁を 7 回まわって鬨の声をあげると城壁は崩れさった。どんなに強固にみえる壁でも攻め落とそうとする粘り強い意思を持つものには破砕できるものだという比喩にもとれる。彼らの聖典に照らしても恥ずべき行動といわざるをえない。現代イスラエルの指導者は聖書に教訓を学ぶべきではないだろうか。

編者ソーキンはアメリカ在住の建築・都市計画の専門家である。寄稿者の国籍も多様で、イスラエル、パレスチナ双方からの寄稿も含まれている。本書はイスラエルの愚行に対して説得的な批判を展開し、「壁」の現代的意義を読者に問いかける。

本書を知ったのは、収録されている **M**・デービスの論考「資本の長城」をドイツの週刊新聞『ディ・ツァイト』に発見したことによる（**Die Zeit, Nr.42, 12.Oktober 2006**）。「南」から「北」への人間移動を物理的に阻もうとする「壁」の増加に警鐘を鳴らす主張に迫力があった。

本書はパレスチナ問題について理解を深めるために重要な文献であるだけでなく、「ベルリンの壁」崩壊に歓呼の声を上げ喝采した人々が、世界中で拡大する隔離の壁に見て見ぬふりをしている現状への警鐘でもある（**Michael Sorkin**（**edit.**）**, Against the Wall. Israel's Barrier to Peace, The New Press, New York/London 2005, 274p.**）。

南北学び合いの枠組を考える
ーV・シヴァ『地球民主主義』ー



地球環境危機、いやもっと正確に言うと地球それ自体の危機を解決するには、全人類の叡智をよせあって人間生活のあり方を全面的に変革しなければならない。しかし、今日の事態に対する責任は何よりもまず先進国が負わなければならないことは言うまでもないが、世界人口の圧倒的部分を占める非先進地域との対話と学び合いこそが変革への大前提である。非先進地域の人々がどのような豊かさをどれだけ欲しているのかを知り、先進国がどれだけを減らさなければならないかを確定しなければならないからだ。それ以上に、非先進地域の人々が地球危機をどのように自覚し、彼らの独自の生活様式を基に変革を提言をしているかを率直に学ばなければならない。先進国がその達成した「豊かさ」によって驕り、優越感を抱く時代は終わったのだ。

V・シヴァ氏は地球危機に関するその鋭い問題提起と実践ににによってすでに著名である。彼女の著書の多くは日本でも翻訳出版されている。お会いする機会がまだ与えられてはいないが、私の最も尊敬する思想家の一人である。氏の仕事を知ったのは、私の勉強不足で畏友 W・サックス

の編んだ名著『開発事典』（**Wolfgang Sachs(edit.), The Development Dictionary. A Guide to Knowledge as Power, Zeds Books, London & New York, 1992,** 邦訳：ヴォルフガング・ザックス編、イヴァン・イリッチ他著、三浦清隆他訳『脱「開発」の時代ー現代社会を解読するキイワード辞典ー』晶文社、**1996** 年 **9** 月）によってであった。「資源」と自然認識を接合させた問題提起に触発され、現在の私の研究視角に大きな影響を与えている。

シヴァ氏は地球上のあらゆる生物種とその生存条件を商品化して止むことをしらないグローバリゼーションとプリヴァタイゼーション（民営化）の進行に抗するために、地球民主主義を提唱する。その主張を **10** の原則にまとめ上げている。

（１）どのような生物種、人民、文化でも固有の価値を持つ。（２）地球共同体はすべての生命体による民主主義である。（３）自然と文明の多様性を守る義務がある。（４）共同体の構成員はすべて生活維持手段に対する自然権を持つ。（５）地球共同体の基礎は生きとし生けるものすべて生命の経済と経済民主主義である。（６）生きとし生けるものすべての生命の経済の基礎は地域経済である。（７）地球民主主義はすべての生命による民主主義である。（８）地球民主主義の基礎は生きと生けるものすべての生命の文化である。（９）生きと生けるものすべての生命の文化は命を育むものである。（１０）地球民主主義は平和、扶助、連帯感情を地球全体に押し広げる。

シヴァ氏はインド的精神世界に独自の自然認識や人間認識を基礎に、地域に保持、共有されている価値を地球全体に押し広げていこうという意志を明示する。

先進地域での変革の道をさぐる私の立場とはまったく正反対の視角からの出発である。議論し学び合う共通の枠組みはどこにあるのだろうか。

グローバリゼーションは資本主義に内在する無政府性を地球規模に拡大し、人間による人間の搾取、自然の収奪をその極限にまで押し進めている。この資本主義に対抗するにはどうすればよいのか。グローバル資本主義の外に強固な連帯的経済関係を構築することだ。日本の現状ではその過程は、すでに壊されたもの、自分の手で壊したものの痕跡を拾い集めて再興する営みを集積する以外にない。それによってグローバルな市場関係でしか生きられないいまの生産・生活様式を下から作り替えていくことだ。

グローバルな市場関係で分断され、グローバル資本主義のイデオローグたちに煽りたてられて失ってしまった人間としての連帯感情を、あるいは全生命体との一体感を回復することだ。それなしには、グローバル資本主義の無政府性や反道徳性を規制することはできない。シヴァ氏の枠組みに私は先進地域での体験と発想とすり合わせをしながら、学び合いたいと思う（**Vandana Shiva, Earth Democracy. Justice, Sustainability and Peace, South End Press, Cambridge, Massachusetts, 2005, 205p.**）。

帝国主義論を学び得た幸運
ー萬谷迪『世界開発と南北問題』ー

　帝国主義論は使命をおえて退場したと主張する人たちは多い。彼らはそう主張することによって、人類史を正当に正確に理解するすべを自ら捨て去ったと言わざるを得ない。

　そのように主張する人たちには無知と偏見がある。帝国主義は一つの歴史的時代である。それについて膨大な理論成果が集積され、またいまに至るまでその集積は続いている。この事実は無視できまい。ロシア革命を契機に展開されたレーニン、N・ブハーリン、トロツキーの問題提起、R・ヒルファーディング、K・カウツキー、R・ルクセンブルク、E・ベルンシュタインに始まるドイツ、オーストリアの社会主義者たち。社会主義者に止まらない。J・A・ホブソンが 1902 年に刊行した『帝国主義論』は現代のグローバル資本主義の寄生性を解明する上で欠かすことの出来ない文献であるし、T・ヴェブレンが 1904 年に発表した『企業の理論』も金融資本を解明した点ではヒルファーディングと双璧である。今日に至るまで続く反植民地主義運動もこれに多くの理論的成果を付け加えている。社会科学を学び、それをなりわいとする人びとがなぜこれらの遺産を惜しげもなく放棄し、無視するのか、私には理解できな

い。
　ソ連をはじめとする社会主義があまりにももろく解体したことは、レーニンをはじめとする共産主義者たちの理論的成果への信頼を揺るがせたことは確かである。しかし、よく考えて見よう。歴史的時代としては帝国主義はまだ100 年あまりしか経過していないのだ。信仰にも近い信頼を寄せていた人びとはともかく、時代の進行を直線的に理解するのはそもそもおかしなことなのだ。勝った負けたという単純な図式で結論づける、あるいは数年の観察で変質したとかしないとか議論するのは軽率すぎはしないか。学者らしくじっくりと課題に取り組み、観察する態度が求められているのではないだろうか。
　畏友萬谷迪氏は長年にわたって、じっくりと腰を据えて、帝国主義論の視点から植民地問題、南北問題の分析視角を探求してこられた。この分析視角は開発経済学の大波に飲み込まれて消滅してしまったかに見えたが、なお生き続けていたのである。本書はその証しである。社会科学の研究に完結はあり得ず、成果はつねに中間的まとめに過ぎない。氏にはこれからも果敢に挑戦し続けて欲しいと願う。列強の介入による戦争の頻発、人的資源も含めた地球資源のすべてを支配し尽くそうとするかのような分割・再分割闘争、地球環境危機と第三世界の危機等、人類が直面する課題の分析は氏の提示した視角なしには不可能なのだから。
　萬谷氏も私も帝国主義論の成果集積を学ぶ手ほどきをうけて成長した世代に属する。この手ほどきを受けたことは幸運であった。その学びがあったからこそ、時代を批判的に理解しようという態度を今に至るまで堅持でき、ささやかな仕事によってではあるが、も帝国主義研究の大河に流

れ込むことができる。十分に学び得ていない焦燥感を感じつつ、その深化のために努力することができる。学ぶ意欲を高揚させることができる（萬谷迪『世界開発と南北問題ー 20 世紀世界経済の課題と発展途上地域ー』八朔社、2004 年 7 月、245 ページ）。

短 信

●通信第 2 号の編集をなんとか終え、印刷、送付にこぎつけることができた。封も切らずに屑かごに放り込まれることなく眼を通して頂ければ幸いである。忘れ去られぬよう年 2 回の刊行を実現したいと決意を新たにしている。今後ともよろしくお願いしたい。
●ワーキングペーパー第 1 号「資源問題と民主主義」も視角の新鮮さについても何人かの方から高い評価を頂き、全文が地域文化学会機関誌『地域文化研究』第 9 号（2006 年）に収録された。それに気をよくしてこのテーマをシリーズで書き続けるつもりである。
●「少子化対策を嗤う」という表題は、気づかれた方もあると思うが、近代日本を代表するジャーナリスト、桐生悠々の論説「関東防空大演習を嗤う」から借用したものである。彼はこの社説によって軍部から圧力を受け、『信濃毎日新聞』主筆の座を追われた。1933 年、61 歳の時であった（桐生悠々『畜生道の地球』中公文庫、1989 年 10 月所収）。気骨の人であるだけでなく自由の人であった。組織に埋没し、孤立を恐れ、時流におもねる今のジャーナリストたち（学者と称する人たちも含めよう）は、彼の論説集に何を感じるであろうか。
●書評・紹介の欄を設けてみたものの、不定期発行では新鮮さを欠くことになり、切り口をどのようなものするか悩んでいる。結局、今回は私の対話者として関心をもった書物を紹介し、関心のありかを示す程度にとどめざるを得なかった。

●活字が小さすぎるとの意見が寄せられた。A4 で編集して縮小印刷する方法をとったので、そこまで気が回らなかった。今回は少々分厚くなることを覚悟の上で活字を大きくし、空白も増やしてみた。
●宅配便を使う方が送料が安くつくとのアドバイスも頂いた。このことも承知している。だが手許にある膨大な切手を私の生存中に使い切ってしまわなければならないという事情もある。郵政公社は未使用切手を買い戻してくれないし､交換もしてくれないことをご存じの方は意外と少ない。最近切手をコレクションしていた人から切手帳の寄贈を受けたので、当分の間切手貼りの作業は続けられることになるだろう。
●通信を印刷、配布した後、久しぶりにヨーロッパへ旅に出る。ドイツのまちをいくつかめぐってからラトヴィア、エストニアにまわり、可能であれば対岸のヘルシンキに出かける予定。フィンランド湾の奥深くサンクトペテルブルクまで足を延ばしたかったが、残念ながら断念。なぜバルト 3 国に出かけるのかと聞かれる。表向きの答えは、旅好きの私らしく、まだ足を踏みれたことのない国だからということになるだろうか。しかし本音のところは、「小国への思い」でも書いたように、グローバル資本主義の周辺が直面する問題を現地に立って考えてみたいという思いが募ってのことだ。メディアはエストニアでの争乱とロシアとの外交関係の緊迫を伝えている。あのように小さな国がそれほどまでに重い歴史的遺産を内包していることを現地に立っていくらかでも感じ取ってきたいと思う。

●通信バックナンバー、ワーキングペーパーはウェブサイトに **PDF** ファイルで公表していますが、コンピュータは不得手という方には、ご連絡いただければ、こちらでプリントして進呈いたします。
●引用、参照は自由にしていただいて結構ですが、可能であれば、私の研究所の宣伝のためにも、出典に明記していただけるとありがたい。